
IS乗りは、魔法関係者

凶鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 乗りは、魔法関係者

【Nコード】

N 5 6 9 2 Y

【作者名】

凶鳥

【あらすじ】

魔法の存在する世界で事件に巻き込まれ目が覚めたらウサギ耳を着けたマッドサイエンティストの目の前だった。

彼は、この世界でどの様生きて巻き込まれていくのか。

IS世界に現れたもう一人の適合者

とある魔法が存在する世界で事件に巻き込まれた。

目が覚めると目の前にウサギ耳を着けたISの母であるマッドサイエンティストの目の前だった。そして、彼女と一緒に世界を周り世界を知った。時が流れ彼は、専用機を持ってIS学園に降り立った。

この小説は、作者の自己満足の為に制作されています。原作崩壊・キャラクター破壊・裏切り・オリキャラ駄目の人は、お帰りください。

良いですね？

本当に良いんですね、後悔しても知りませんよ。

では、後悔しないと言うならどうぞお入り下さい。作者の独自判断偏見と原作崩壊だらけの駄文小説に。

ブローグ？

とある魔法が存在する世界で遺跡調査の任務をしている。

「はあゝ何処が安全な任務だよ！たくっ…さっさと封印処理を施そう」

遺跡の奥深くに鎮座する様に置かれた手甲…見た目は、普通だが禍々しい程の魔力を放っていた。

「さて、setup」

「yes・Master」

彼の首に有るネックレスの蒼いビー玉から音声を発し、彼を黒く所々金色の混じった光が包み込み、白い騎服に包み込まれた少年が口ツドを手を持ち魔力を放つ手甲に封印処理を施そうとしたが…

「っ…うぁ!？」

手甲が意気なり彼の目の前まで迫った瞬間強烈な光を放ち彼を呑み込み光が収まると、世界から彼と手甲は、消え去っていた。

ブローグ？

光に包まれた少年が消えたと同時にかん。

地下研究施設

「んゝ何で、機動しないのかなあ？」

女性が機械に向かって何故か機動しない物を指で、突っついていた。

「何で、このIS女性に反応しないんだろっ？他の子達は機動したのに？」

インヒユニットストラトス通称『IS』平たく言うとパワードスーツ。日本の篠ノ之束博士が開発したISは、現代兵器を著しく上回るスペックを持つものの女性しか反応しないはずなのだが、創ったわ良いが反応すらない。

「んゝ分かんないや…休憩休k…」

女性が目を外した瞬間強烈な光が薄暗い研究室を一瞬照らした瞬間、機動しなかったはずのISが機動し出し見慣れない少年がISに抱き抱えられる様に収まっていた。

「えっ！？…何処から来たの？君は、ダレだい？」

ISに収まっていた少年からは、返事が返って来ることは、無く不思議に思い近付いてみてやっと理解した。

きゆう〜
…

「寝てるよりも…気絶しちゃってるね。」

これが、IS開発者である人と少年の出会いである。

「この子どろしゅっ。」

ブローグ？（後書き）

封印処理を失敗。ロストログアと一緒に飛ばされ、気絶したまま初接触締まらない？

主人公とIS紹介（前書き）

簡単な紹介

主人公とIS紹介

今作中のオリジナル主人公

名前：ライト・スヒールス

見た目：キラ・ヤマト（目付きを鋭く甘さを消した感じ）

所属：管理局航空部隊（現在IS学園生徒）

年齢：10才（開始15歳）

趣味：小説・料理・機械整備

好き／嫌い：寝ること／寝ることを邪魔されること・面倒くさ事

専用IS：セツゲツカ雪月華

見た目：ストフリの白銀一色

期待の特徴として、月灯りに照らされたような冷たく何処と無く柔らかい白銀。エネルギーを魔力転換式にしているため50000迄有るが基本定められたエネルギー1000使用

武装

自立行動型：40枚からなる翼型ビット（射撃）

遠距離射撃型：ライフル

中距離射撃型：レイルガン近距離剣撃型：ブレード

単一使用

魔力轉換式のエネルギー使用

主人公とIS紹介（後書き）

変わるかも。

目覚め（前書き）

寝坊助主人公がやっと起きた！！

目覚め

ライト視点

「うんっ…ん？」

強烈な光がライトを包み込み目が覚めると、自分が今まで居た空間と違う事に困惑してると…

「あつ目が覚めたんだねヤッホー大丈夫？意気なり現れてビックリしたよ〜」

声を掛けた人に目をやると頭にウサギの耳だろうかそんな物を着けた女性が居た。

「済みません、俺何で此所に？」

「ん？覚えて無いのかな？光と一緒に現れたんだよ？」

「強い光…！？済みません此所って管理世界の何番目ですか！！」

自分が現れた理由を聞いて割れに帰り自分の居た世界が気になった。

「管理世界って何の事かな？ここは、アマゾンの地下にある私の隠れ家（研究室）だよ〜」

「アマゾン？」

自分の知識にそんな所は、存在せず別世界に飛ばされた事を知った。

一応デバイスで連絡を取ろうとしたが反応無し…と云うことを女性に話したところ

「初めて見たよ君見たいに時空を超えた人。分かりやすく言ったら、パラレルワールドかな」

「……パラレルですか。どうするかなコレから……」

自分が知らない世界に飛ばされ、しかもいく宛が無く呟くと助け船を出してくれた。

「君に興味湧いたし、私の助手しない？と云うかなってね」

「助手ですか…行く宛何て有りませんから。お世話になります。あつ俺は、ライト・スヒルスです。」

「ライト君ね、私は………篠ノ之束だよ宜しくラト君」

「ラト…分かりました。此方こそ宜しく束さん。」

「うん宜しい」

束さんの元で生活する事になった。

目覚め（後書き）

短く区切って、考えての亀更新たまに後組まれに長くなるかも？

一変した生活（前書き）

思いついたので投稿。

一変した生活

篠ノ之束さんのところに転がり込む形で、助手となって早くも1年が過ぎた…

「束さん、何時まで弄ってたんですか！ちゃんとベッドで寝なさい！！！」

「ああ、たくつちゃんと食べなさい！」

「ほら、動かないの！髪の毛拭けないだろ！」

等々年上の筈なのに手の掛かる妹見たいな感じになりつつあるが目が冴え、ISを弄くる時だけ真剣に取り組んでああやはり凄い人だと思う。それ以外は、アレだが。

「ラト君、珈琲お代わり貰えるかな？」

「すぐ用意しますね。」

今の束さんが取り組んでいるのは、今まで機動せずライトを認識し機動したIS完成したら、俺専用機として使って良いらしい。

ピーー

「おっと、お湯が沸いたな。」

珈琲を束さんのマグカップウサギのマーク付きに注ぎ入れ、溢して機械を駄目にしないように少し離して置き…

「束さん、お代わり出来ましたよ。熱いですから気を付けて下さいね。」

作業の手を一旦休め、注がれた珈琲を一口

「うん♪やっぱりラト君の入れてくれた愛情タップリ珈琲美味しいね♪」

「あはは、コレからも愛情タップリ注ぎますね（笑）」

「うん♪…と、ラト君の射撃データーと近接データー録りたいんだけど大丈夫？」

「大丈夫ですよ。ようやく乗れるんですね？」

「ラト君が持ってた…何だっけ？」

「デバイスですね。」

「そうデバイスのお陰で何とラト君の魔力をエネルギーに轉換して使う事が出来る様になりましたしかもデバイスのAIを使ってコミニケーション出来る様にしましたあゝ誉めて誉めて♪」

「はいはい。」

頭を撫でられる束さんは、ウサギじゃなくて尾っぽを振る犬に見える。兎に角可愛い。手を離すと…

「あっ…」

もつと撫でて欲しいなって顔してくる。

「（可愛いなチクショウ!!）」

暫く撫で続け、満足したようで本題のデータ録りになった。

バヒュン…バヒュン…バヒュン…

500m先の的（米粒大）に当てる事数回可なり集中力を使う為データ録りは、二日に分けた。

「凄いね」ちーちゃん見たいに正確に的に当てるし、切り口（木材）も綺麗だよ」

「あのちーちゃんってダレですか？」

「ちーちゃんは、ちーちゃんだよ」えつとね織斑千冬って言う幼馴染みですごく強いんだよ」

「織斑千冬…それで、ちーちゃんですか。」

「ん？ラト君目付き変わったねえ」戦って見たい？」

「出来るんですか!？」

「この天才束さんに任せなさい!ちょうどドイツに行く予定だったのだよ」じゃ仕度しよ」あつそれとISの名前決めた？」

「はい、雪月華です。」

「月に照らされた雪の華…良い名前だね♪じゃあもうラト君のだね。準備して行こっか♪」

「はい！つで此処どうします？」

「んゝ後々面倒くさいし、荷物出し終わったら破壊しちゃおう！景気よくバァンって♪」

その後、束さんお手製の人参型ロケットに荷物を詰め込み、研究所に時限式C4（プラスチック爆弾）を大量に埋め込み新たな地に向かう事になった。

余談だが、火薬の量が多すぎたのか研究所から半径一キロの大穴が空いていた。メディアで隕石騒ぎになっていた事をここに記しておく。

一変した生活（後書き）

年齢を感じさせない篠ノ之束さん…本当に歳上か？

次は、ドイツ！！

Brocken行ってみたい？

ドイツだぁ！！（前書き）

織斑千冬さん登場！！

書いてて分からなくなってきた…話が合わないかも？

ドイツだぁ！！

アマゾンの研究施設からドイツに行く間地獄だった。

「ラト君、ちゃんと掴まっていないと危ないよ」

「うんなこと言っただけ……」
バン！

アマゾンの奥地からドイツまで所要時間約30分ほど。ロケットの中は、急激な加速力によって後ろに飛ばされたライトは、束さんに言い終わる前に後部の鉄板に押し付けられた。ミシミシ！と此が減速するまで20分間ずっと重力に押し付けられた。

「おえ……白い悪魔が優しく感じる（泣）」

ロケットから降りたライトは、新人の頃しごかれた管理局の白い悪魔（高町なのは）が優しい方だったと改めて感じた。そして下っ凶の束さんは、『うん』流石天才束ちゃんだね、予想した通りの時間に着いたよ』と言った。

「（死ななくて良かった。）でこれからどこに行くんですか？」

ドイツに来たのは、束さんが強いと言った織斑千冬さんの所なのだが、場所を知らない為聞いてみた。

「ん」とね、ドイツ国内軍事施設でIS配備特殊部隊の所だよ。ちーちゃんが確か教官をしてる筈だし、束さんは、その知り合いに顔を出す予定なのだよ」

「知り合いですか？司令官とか？」

「そうだよ、ハッキングしてバレちゃって友達になったんだ」

「今、ハッキングしてって！？大丈夫ですか！！」

「大丈夫だって」心配してくれるのかな？」

「そりゃあそうでしょ！？」

「ん」ありがとね、じゃあLet's Go！！」

束さんの掛け声で、目的地に向かった。そして二人を出迎えてくれた人が織斑千冬さんだった。彼女は、艶やかな黒い髪で凜とし軍服が栄える様な人と言うのが俺の印象だった。

軍施設内

「束、お前が他人に興味持つなんて珍しいな。」

「ん」そうかなあラト君は、助手兼男性初IS乗りだからね」

「今何て言った？私の聞き間違い出なければこのラトと言う少年がISを操れると聞こえたんだが？」

「間違ってますね、後ラトでわ無くライト・スヒールズと言います。」

千冬さんの答えに束さんの代わりにライトが答えた。

「束…何をした!!」

「束さんは、何もしてないよ？憶測になっちゃうけど、束さんが創ったISのコアがラト君を求めたんだと思うんだ。それにラト君のISわね、この天才束さんでさえ機動出来なかったのに…彼をマスターと認識して受け入れちゃったんだよ。」

確かに束さんが言った事は、間違っていない。ライトが雪月華と対話する事で分かった事を伝えそれを今、束さんが千冬さんに説明していた。（別世界から来たこと以外）色々考えている内に束さんと千冬さんとの間で何か有ったらしく…

「厄介だが私が預かるう。」

「じゃっ任したよ。ちーちゃん、四年後にIS学に転入宜しくね〜
じゃあね〜」

「えっ四年後って束…まじか!？」

ライトがビックリして束さんに聞き返そうとしたら既に居なくなっていた。

「スヒイルス、早く来い!」

「了解しました!教官殿!!」

「では、私が居る一年間私がスヒイルスを鍛え上げるから覚悟しろよ。後三年は、この部隊で吸収するなり、己を磨け良いな?」

「宜しく願います。」

まあ東さんが強いつて言ってたしその力見せてもらうつとしますか。
東さん…会ったら覚えとけよ？

ドイツだぁ！！（後書き）

読み辛くて御免よ！

でも此が作者の限界！！

言ったよね後悔しないならいいよって？

後悔したなら good-bye

物好きな人だけどうぞ！

次は、シュヴァルツ・ハーゼ

黒ウサギ（前書き）

文才無いって辛い。取り敢えずドイツ編です。

黒ウサギ

束さんにおいてけぼりを食らわされ、織斑千冬さんが教官をしているIS配備特殊部隊に短期間（数年）加わる事になった。

「よし、諸君今日から短い間だがシュヴァルツ・ハーゼに入る物が居る挨拶しろ！」

織斑教官に連れられ演習場の端に部隊の子達（女子ばかり）が綺麗に整列している。

カツカツ…

教官に呼ばれ、部隊の前に進み出て紹介となった。

「三年程シュヴァルツ・ハーゼに組み込まれる事になりました。ライト・スヒールスで有ります！」

管理局に居たときと同じ様に直立不動敬礼をしながらの挨拶をし終わり、教官から一言入った。

「スヒールスは、機密事項に値する世界初の男でIS使いだ。この部隊以外口外するな！」

「「「sir!!」」」

「ラウラ・ボディビィヒ大尉、スヒールスのお守りを頼むぞ。」

「sir！」

ラウラ・ボディビィヒと呼ばれた少女は、部隊長なのか同い年ながらも回りと違う凛々しさが有り、銀髪で雪の様に白く目は、片方を眼帯で隠してない方は、紅い目が宝石の様に綺麗だった。

紹介が終わり、教官が離れると各自訓練に入って行くなか…声を掛けてくれた。

「ラウラ・ボディビィヒだスヒールスだったな。私が面倒を見てやる。」

「sir！ボディビィヒ大尉殿不馴れな事も有ると思いますが宜しくお願いいたします！！」

これが、ライトとラウラの出会いである。初日は、シュヴァルツ・ハーゼの施設説明（機密度level3以下の）をしてもらいながら各部署を回り、最後に自分に宛がわれた部屋（二人部屋）

「ボディビィヒ大尉殿、この部屋は？」

「私とお前の部屋だが？どうした？」

「（女子と相部屋って何？）いえ、何でも有りません！」

「そうか。PX（食堂）は、0500～1930までなら使用可能だ。風呂は、部屋に有るシャワーだ。質問は、有るか。」

「大尉殿…訓練等は、今日から開始しても？」

ライトの発言に少し思う事が有ったのか少し考える素振りをして

「…構わんが、そつだなまず、体力・射撃精度を見せて見る。メニユーは、それからだ。」

まず、時間が時間なので20?を背負った10Kmタイムを計った。舗装された道でわ無く砂利道・林道・泥濘・山道等が織り混ぜられた場所をだ。昔よりタイムが落ちていたが、ラウラからすれば納得する様なタイムを叩き出すと、高圧的な態度が和らいだらしくファーストネームで呼ばせてくれた。

カシャタンツタンツタンツ…カシャタンツタンツタンツ

一定のリズムでライフル（Gewehr 43）から発射される弾丸は、的に吸い込まれる様に当たって行く。

一通り終わるとラウラは、黙って何か考え出した。

（…）

「ラウラ大尉殿」

「スヒイルスその何だ…訓練以外は、ラウラと呼んでくれないか？
／／」

同年代の男の子と話す間に年齢層に合う喋り方に変わって部屋に戻ると今の状態になっていた。

織斑教官の指導期間が終わってからと言うものの毎日のようにラウラ大尉達との訓練を（ISを使用）繰り返し御互いを高めている。

「今度こそ勝たせて貰うぜラウラ！」

ライトは、模擬戦開始と同時に離れるとライフルを構え一発

バシユッ

「また、それか馬鹿の一つ覚えだな！」

ライフルから撃たれたレーザーを横に傾く形で交わし…

「誰が馬鹿の一つ覚えだって？砕ける！！」

バツン！！

ライトが言葉を発すると同時にレーザーは、拡散し細かい線がラウラのシールドを削る。

「なっ！？レーザーに圧力を掛けて拡散に変えただと！！」

ラウラが驚いた事にしてやったりと笑みを浮かべたがその隙が不味かった。

「言った筈だ、戦闘中に隙を出すなと！！」

ビュンビュッ

ライトの後ろからラウラの遠隔操作したワイヤーが片足を縛り上げた。巨大なレールキャノンを向けた。

「んげっ！…ちっ一番から十番行けっ！！」

織斑教官と模擬戦した時にださなかつ武装独立自立型ビットが翼から離れラウラ目掛け弾丸の様に向かって行った。

「何だその武器わ！？私は、知らないぞ！」

回避に専念するためかライトに絡めたワイヤーから意識を話してしまった。そうなれば、ただの鋼線斬るなり外すなり用意になった。

「そりゃそうだ。初めて使ったし、使う機会が来ると思って無かつたんでね。十一番から十四番シールドとして待機十五番から二十番一番から十番と共にツイン体制雪月華、微調整頼むぞ。」

「OK My Master」

ラウラでさえ聞いたことの避ける中ラウラが聞いた無い機械音声とライトの声が聞こえた耳に入った。

と同時にラウラの目の前は、暗くなり気が付くと見慣れた天井自分の部屋だと分かったが何故かベッドに寝かされていた。

「ん、気が付いたか？」

ベッドの横にライトが座り心配そうに見詰めていた。

「ああ、ライト…私は、負けたのだな。」

「…実は、ラウラのワイヤーで結構エネルギー削られててな…同時にエネルギー切れで引き分けた。」

「…そうだったか。運んでくれたんだな。」

「まあな。ドイツで初めての友達だからな。」

ライトは、頬を掻き照れ臭そうに言った。
それに対してラウラも笑みが零れた。

「友達…初めての言われたな…ライトが私にとっても初めての友達だ／＼」

「そうか…」

ライトが少しうつ向いた。

「どうかしたのか？」

「実は、明日ドイツをたつて日本のIS学園に行く事になった。」

「えっ…」

そうだ。ライトは、元々技術を学ぶために此所に来たのだ。そして、織斑教官に日本のIS学園に入る様に連絡が来たのだ。気絶したラウラを運んだ後直ぐに。

「ライト…行かなくてわならないのか…」

「ああ…」

「な…ら、準備し…ん!？」

さっきまで笑みが零れラウラが今にも泣きそうな声を絞りだそうとすると何か暖かい物で包み込まれた。

「ラウラ…俺…君に出会えて良かったこんな俺と仲良くしてくれて嬉しかった」

ラウラは、ライトの声が耳元で聞こえライトが抱き締めてくれていると知ると…

「私も…ライトに出会えて良かった。」

「さよならは、言わない。また会おうなラウラ。」

「グスッまた一緒に…グスッ……」

ラウラは、ライトの胸の中で泣き彼の暖かさに包まれながら眠りについた。目が覚めると、ライトの荷物は、無くなっていたが微かにライトの温もりを感じた。

「この部屋こんなに広がったんだ。ライト…次会ったらもう私は、離さないから。」

ラウラとライトの新しい歩みが始まる。

黒ウサギ（後書き）

作者が思うに原作ラウラが捻れたのは、織斑教官の精神ケアをおこたったものと考え、主人公に好意を寄せる様にしました。
次回ISS学園本編に入る予定です。束さんによる無茶苦茶な放送を
してもらう予定です。

駄文読んでくれてThank you!!

降り立つ（前書き）

単行本に無い内容なので想像で書きました。では、どうぞお楽しみ下さい？

降り立つ

ドイツから飛行機で、日本に渡り空港に着き…

「ふゝここが日本ね」

ライトが空港から出てIS学園最寄り駅まで歩いて行くとやたらと女性からの視線が痛い。

「ねえ見て彼じゃない？」

「えっ本当だ！？」

「彼が噂の！」

ライトは、気になり話をしている女性に聞いてみたところどうやらテレビに取り上げられていたらしいしかも束さんが代替的に。電気屋だろうか今まさに聞いた内容がテレビ放映されていた。

『ニュースをお届けします。一週間前にIS発案者篠ノ之束博士より送られた映像ですでは、どうぞ』

テレビに何時もの様に、ウサギ耳を付けのほほんとした束さんが写っていた。

「元気にしてるんだな。」

『「ハロハロ天才束さんだよ今日は、ビックニュース何と私の見つけた初男の子でISを使える子見付けちゃった」その名は、ライト・

スヒールス君。もし彼にチョッカイ出したらその国一つ消えちゃうかも♪じゃ、ばいびい♪」以上が東博士より送られた映像です。なお先日二人目の適合者が…』

名前を言うところで自分の顔写真が出された。

「うわっ…なて言うか面倒な…事を」

テレビを見た人達が俺の顔を見るなり逃げ腰になっている。

「何この危険物扱い!?!」

さっきの映像のお蔭?で、絡まれる事無く最寄り駅に着き誰も乗っていない電車モレールに乗り移動中

「へえ〜学園って言うからそれなりと思ったけど、島一つが学園何だな。」

目の前に映るのは、回りを海に囲まれ幾つものドームが有り、搭だろつか?がそびえ立ち白い学園だった。

『ご乗車有り難う御座いました。次は〜終点IS学園前〜お忘れ等御座いませんようお気をつけ下さい。』

電車を降り、ホーム(駅)を出ると懐かしい人が出迎えてくれた。

「お久しぶりです。教官…いえ今は、織斑先生ですね。」

「ふっよく来たな。スヒールス少しは、強くなったか?」

「さあどうでしょう?」

「相変わらず食えん奴だな。まあ良い一応入試だ一戦どうだ。」

「願ってもない。嬉しいですね強い相手わくわくしますよ。」

「では、着いてこい。」

先生に連れられ、さっき見えていたドーム…アリーナと言うらしい所に連れてこられた。回りを見ると同じ試験者だろうか女性がちらほら見える。1つの部屋につくと…

「スヒイルス、ここでスーツに着替えてこい。その後会場に連れて行くからな。」

「了解。直ぐに着替えますね。」

ライトのISSスーツは、長袖タイプでお腹当たりが露出しており、パンツも脛真ん中辺りまで有り他のと比べて露出度が極めて低いのに着替え待ってくれている先生の元に行った。

「スヒイルスお前達男は、アリーナの一室を使って着替える様にしろよ。では、行くぞ。」

歩いて行くと発艦場所テレポートみたいな所に行き…

「あれの試合が終わった後お前の試験だからな。」

「了解。所で先程男達と言いましたが俺以外にも?」

先生は、額にてをやり

「私の愚弟だ。今試験してる奴だ。」

アリーナ内を見ると、女性と男が対峙し女性が突進し男が横に避けると…

バシン！

「きゃうー！！」

自滅した。

「……あのー織斑先生、女性の方が自滅しましたが…」

「……………はあ」

更に頭を抱えた。

ピットに女性が戻って来ると…

「山田先生！慣れない男だからと自滅して…」

「済みません済みません済みません済みません済みません」

激突した緑髪の女性は、この学園の先生だった。

「織斑先生この子は？」

「短い間だったが私の弟子ライト・スヒールスだ。」

「ええ〜じゃあ師弟対決ですか！？しかも初ISを使える男の人！
！」

「うヴん…スヒイルス、準備出来たら出る。私は、先に出る。」

咳を一つつき日本製IS打鉄を纏い先に出た。

「久し振りだ全力だ！！雪月華！」

「OK My Master」

ISを起動させ、カタパルトに脚を置き

「ライト・スヒイルス雪月華出撃するぜ！！」

バシユツ！

体を前に傾け大空に舞う白銀の雪月華。

アリーナ内織斑先生が試験相手と知り観客席に続々と生徒達が集ま
って来た。

「御待たせしました。織斑先生。」

「いや、待つて無いさ。訓練見たいに手を抜かず全力で来い。」

試験のカウントが両者の間に標識された。

「あれ、気付いてましたか？」

？

「当たり前だ、伊達にスヒイルスの師匠を名乗ってないからな。」

？

「じゃあ師弟の胸を借りるつもりで全力で行きますよ！」

？

「さあ来い！！」

？

ライトの試験が開始された。

「一番から四十番まで射撃及び斬撃四十一番から五十番防壁に！さあ行くぜ！！」

各ビットに指示を出し、手に射撃ライフルを出し打ち出す。

「ちっ…本当に手加減していたのだな。見たこと無い物ばかりだ！？」

ライフルから出るビームとビットからなる射撃斬撃をかすりながらも避けて行く。

「流石ですね、師匠。訓練の時は、ブレードとレールガンだけでしたからね。じゃ行きますよ」

ライフルを消し代わりにソード（両刃刀）を双振り出しイグニッションブースト（瞬間加速）で接近し切り付けようとしたが

「まだまだツメが甘いな。そら！！」

ビットと射撃でかなりのエネルギーを消費していた。師匠の斬撃が当たる瞬間一振りの剣で弾き返した。

「師匠もですよブレードは、二本です！しっ！！」

ビー… 『試験終了同時にエネルギーが切れた為引き分け。』

そうライトの斬撃は、確かに当たった当たったのだがビットをしまつて無かった為そのままエネルギーを消費しエネルギーが同時に切れたのだった。

「はあゝ盆ミスでした。」

「何を言う。胸を腫れ！ミスだとしても一撃入れたんだ誇っても良いぞ。」

「いえ、なら引き分けで御願います。」

師匠は、頬を緩め『可笑しな奴だ』と言い

「ようこそISS学園に歓迎してやる。」

降り立つ（後書き）

師匠の威厳は、保つぞ！！
次は、原作主人公と接触だ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5692y/>

IS乗りは、魔法関係者

2011年11月18日22時15分発行